

---

# 第1部 はじめに

---

## 東京大学音楽部管弦楽団の歩み

当管弦楽団は、大正9年、東京帝国大学音楽部として発足しました。当時オーケストラといえば、宮内省や上野の音楽学校のほか、九州大・慶応大などいくつかの大学にあるに過ぎず、プロのオーケストラは存在しませんでした。しかし、そうした中で当団は、楽器や楽譜の調達に苦労しながらも発展しました。大正から昭和初期にかけては、ベートーヴェン交響曲第4番等、当団の演奏が本邦初演となる曲も少なくなかったとのこと。

戦後、本郷とは別に旧制一高のオケを前身として駒場にもオケが誕生し、当初は別々に演奏活動を行っていましたが、昭和28年に合併しました。

昭和30年代に入ってから著しい発展を遂げ、特に昭和34年に早川正昭氏が常任指揮者に就任して以来近代曲なども意欲的に取り上げるようになり、部員数も増え、30年代末までには100人を超えるようになりました。そして41年にはヨーロッパ演奏旅行を行い、好評を博しました。その後、東大紛争下の新入生募集中止による部員減少などを始めとする数多くの困難に直面しましたが、それらを乗り越えて活動を続け、昨年、創立100周年を迎えました。現在は約140人の部員を擁しますが、大学オケとしては、これは高い水準であると言えるでしょう。

創立以来、当団からは近衛秀麿・柴田南雄・別宮貞雄・早川正昭の各氏をはじめ音楽界に数多くの人材が輩出しています。現在は、今年度で第107回を迎える定期演奏会や、日本各地を訪ねて演奏するコンサートツアーを活動の中心とする一方、学園祭での演奏会や小中学校を対象とした音楽教室等、多種多様な演奏活動を行っております。

---

# 名誉指揮者 早川 正昭

東京大学農学部卒業・東京芸術大学作曲科卒業

広島大学名誉教授

今から約60年前、私は身体検査が終わると、駒場寮の一室にある音楽部の部室に飛んでいった。部室には桑さんという人が一人でクラリネットを吹いているだけだったが、私が入部を申し込むと、こんなに気の早いやつは見たことがないといった顔で対応してくれた。私はなぜ東大を受けたかと聞かれたので、東大にはオーケストラがあって、たくさんいろいろな楽器があるからだと答えた。私は、父の後を継ぐために医者になるつもりで、(当時は理3がなく)理2にはいったのだが、両国高校で皆とオケを作って一通りの楽器はなんとか弾けたから、大学でもいろいろな楽器で遊べる所に入ろうと思ったからだった。

さっそく、新入生歓迎演奏会の練習があるから何日の何時に来いとのことと、私は両国高校のチェロを借りて、最初の練習に参加した。いまの900番教室の左側の控え室が練習場。狭いところだが、当時は教養学部のオーケストラは本郷とは別に独立しており、練習に集まった人数も弦が12～13人で管は5～6人くらいだった(と記憶している)ので何とか練習できた。練習は一回だけで、曲目はワルツ「芸術家の生涯」その他だった。本番ではホルンが足りないのでホルンを吹いてくれ、といわれた。

さて、入学式のときは、安田講堂の二階のオーケストラボックスのすぐ側に席を取り、奏楽を上からのぞき込んだ。曲目は覚えていないが、最後に学生歌をやり、オケ用のへ長調の楽譜の中に、合唱伴奏用の変ホ長調の楽譜が入りまじっていて、いとも珍奇なすさまじい音がしたのを覚えている。恐らく練習なしで、本番ぶっつけだったのだろう。

さて、新入生歓迎演奏会に出演し、自ら自分を歓迎するはめになったが、当日両国高校のホルンを借りて駒場に乗り込んでみると(教養学部管弦楽団は旧一高菅弦楽団から売りつけられた楽器一最も金はとうとう払わずじまいだったとか—チェロ、トランペット、ホルン、トロンボーン、クラリネットが各一つずつくらいしかなかった。)、今日は2番クラリネットが都合が悪くてこないからクラリネットをやれと言われた。使い慣れていない楽器なので2～3回キクス(キャーという音)をやらかした記憶がある。

……というように、高校までに合奏の経験があり、しかもかなり図々しい人間にとっては、オーケストラは入ってすぐ楽しめるものであるが、合奏の経験が乏しい人間には、オーケストラに入ると最初はついていけずに悲観する人もいる。合奏というのは要領のいるもので、技術的に下手でも、いわゆる合奏慣れしている人はすぐ楽しめるのである。

---

まず、楽譜に忠実になろうとしすぎないこと。難しいところをちゃんと弾こうとして他の人より遅れてしまうことが多い。はじめのうちは一つの音でもいいから弾けるところは思い切って弾いて、難しいところは練習して弾けるようになるまで音を出さず、楽器は構えたまま楽譜をテンポ通りに目で追うだけにし、少しできるようになったら重要な音だけを拾い出して弾くようにすると良い。そういうようにしても合奏は楽しいものである。

そうしてだんだん弾けるところを多くしていくのである。本番になって、まだ弾けないところがあっても、くじけてはいけない。本職でも弾けない世界的難所がある。本職はさも弾いたような顔をしているわけである。アマチュアはそういう難所が多いというだけだ。

次に注意がいるのは棒の見方である。曲の始めとか、長い休みの後で（休みはちゃんと数えること）次に出るところ、テンポの変わり目（テンポルバートやリタルダンド等を含む）、フェルマータ、曲の終りでは必ず楽譜を覚えて指揮者の顔を見ること。棒の先を見るのではない。顔を見ていれば、棒の動きも自然と視野の中に入っているわけだ。それ以外のところでは、楽譜を見ながら何となく棒の動きが視野の中に入るようにする。そのために、譜面台の高さを加減しておくのである。

棒は一拍目にはたいてい縦に振り下ろされる。何かをたたき形になる。一番棒が下がったとき、つまりたたいたときに音を出すべきである。指揮者によってはたたいた少し後に音を出させる人もいるが、たたき前に音を出させる人はいない。慣れていないと何となくあわて、棒が下がりだすと音を出してしまう人がいるが、それだと人より先に出てしまうので、気をつけなくてはならない。

後は周りの人の気配を察して、音を出すとき、切るとき、音の高さ、音の大きさ、音色等を合わせることに注意するのである。もっともこれが大変難しい。すぐには言わない。ゆっくり楽しみながら会得してほしいと思う。皆の気持ちがピッタリ一つになって、良い音がすること、これが合奏の醍醐味の一つである。そしてこの楽しさが分かったら、それは人生の中で最も楽しい事の一つであることは間違いない。

---

# 桂冠指揮者 三石 精一

東京音楽大学名誉教授

E.カニングハム記念青少年音楽協会代表理事

元読売日本交響楽団専任指揮者

元東京ユニバーサルフィルハーモニー管弦楽団音楽監督・常任指揮者

## 一生の良い思い出を！

皆さんが入部なさった東京大学音楽部管弦楽団（通称東大オケ）は、昨年創立百周年を迎えました。しかし全く予想外のコロナ禍によって、無観客での駒場祭を除く全ての行事や演奏会が中止されてしまいました。

この文を記している2021年3月初旬現在も未だに緊急事態宣言延長下ですので、新年度の見通しは全く付きませんが、今年度はこのオケが新しい百年に向けて第一歩を踏み出す大切な年ですので、一日も早く感染拡大が収束し、入学式などの行事は無理としても、五月祭から始まる数々の演奏会が無事に実施出来て、皆さんが東大オケに入って本当に良かったと思える様な幸運の年になる事を心から祈っています。

私と東大オケとの付き合いは、オケ創立50周年に当たる1970年度の第56回定期演奏会で「第九」の指揮をして以来なので約半世紀に及んでいます。東大オケに出会うまで全くアマオケの経験が無かった私にとって、それ迄は思いも寄らなかった細部に至るまでの基礎的な練習をする必要が生じた事は、その後の音楽生活に非常に役立つ得難い有益な経験となった事に今でも感謝しています。

皆さんが部活として、人間関係やそれに伴う責任感が非常に大切なオーケストラを選ばれたことは、そこでの経験がきっと将来のお仕事や友人関係に役立つ一生の財産になる事と思います。

音楽は全ての人々の心を癒す事も、楽しませる事も勇気づける事も出来ますし、1人で楽しむ事も、2人、3人、数十人、数百人でも、その上聴衆を加えれば数千人、数万人でも同時に楽しむことが出来る、無限の可能性を秘めた最高の芸術です。その中でも、大勢が心一つにして音楽を作り上げるオーケストラという分野に於いては、オーケストラでしか味わえない連帯感を充分に感じ取り、その魅力を充分に堪能して頂ける筈です。どうぞ、部活でのオーケストラを思う存分楽しんでください。

但し、オーケストラを楽しむためには正しく演奏されなくてはなりません。音程やリズムが悪ければ皆で音楽を楽しむ事は出来ませんし、弾けない箇所や吹けない箇所が有っては皆の迷惑になりますから、もし不安な箇所が有ったならば、個人的に出来る限り練習を重ねてから合奏に参加する様にして下さい。

何れにしても合奏の場は個人的な練習の場ではなく、各々が努力を積み重ねた結果を持ち寄って、一緒に音楽を作り上げる場所なのです。

その様な努力を重ねた末に迎える本番での達成感は、何物にも代え難い貴重な財産となって、皆さんの心に何時までも残る事でしょう。

どうぞこの東大オケで、一生大切にしていけるような素晴らしい思い出を作ってください！

---

## 常任指揮者 田代 俊文

東京音楽大学指揮科卒業  
東京音楽大学指揮科教授

---

…巨匠の作品は、あたかも容器（うつわ）の様なものであって、いつでも君の精神のながれを受け入れようと待ちかまえているのです。

名曲という、このみごとな構成物こそ君の存在の他の反面なのだ。

暴力を加える事なくそれをかきいだし、それに生气をあたえなさい。

それによって自己をたかめ、そして成長してください。

予感されたる国の、この神々のすがたともいふべき巨匠の作品に、君のあたたかい生命の力をおあたえなさい。

君は一人の創造者になるのです……

エドウィン・フィッシャー（ピアニスト）

---

音楽という芸術の特異点として、作品とそれを鑑賞する人との間に演奏という行為があるということがあげられます。他の芸術（美術や文学等）は、作品そのものが直接鑑賞者に作用しますが、音楽の場合は作曲家とその作品を聴く人の間にワンクッションあるわけです。

演奏者は作曲家と聴衆の間の橋渡しをする存在なのです。

演奏者は作曲家の楽譜に込めた思いを聴く人に伝えたいと思いますが、相手は大作曲家、天才達なのであります。そう簡単にはその高みに到達することは出来ません。いつも己の未熟さを思い知らされつつ、それでも何とか作曲家の思い描いた高みに到達しようと、演奏者として巨匠達の作品を深く勉強すればする程、その美しさ、力強さ、崇高な精神に心を打たれます。

オーケストラは大勢の人間が集まって演奏に取り組みます。100 人の人たちが指揮者を見たり、同じパートの音を聴いたり、ハーモニーのバランスを気にしたり、コンマスのタイミングを計ったり、実に様々な事を考えたり感じたり、反応したりしています。そこには日常生活では考えられないくらいの人間同士の親密なコミュニケーションが存在します。

オーケストラで演奏するという事は、神々の作品とでもいふべき巨匠達の作品を直接肌で触れ、また同じ思いを、同士達と密なる時間を過ごしながらかち合うということなのです。東大オーケストラは本当の意味での良いアマチュアリズムを持った学生オーケストラであると思いますし、そうあれとも願っています。皆さんもこのオーケストラで生涯の趣味と生涯の友を手に入れてください。

音楽を演奏する、楽しむ、という事を通して皆さんの学生生活、オーケストラ生活が実り多きものとなるよう願ってやみません。

---

# 常任指揮者 河原 哲也

東京音楽大学指揮科卒業

あちこちの学生オーケストラや市民オーケストラの人達と出会うと、本当に音楽が好きで、楽しんでいるなあと感じます。不幸にして(?)音楽を職業としてしまった僕は、正直言って楽しんでばかりもいられないところもありまして、音楽は趣味のほうが良いなあとアマチュアの人をうらやましく思うことさえあります。そんなとき、自分が音楽を始めた動機は音楽が好きだったこと、その原点に戻って楽しんでいきたいと思っています。

さて、オーケストラの魅力って何でしょうか。僕が思っていることは、「一人じゃない」と言うことです。一つの旋律も皆で弾けば厚みが出る。一つの音に別の音が加わればハーモニーができる。一人で弾けないことも皆でなら弾ける(弾けたように聞こえる!?)。大勢の人が天才作曲家の世界に近づこうと心を一つにし、神経集中して演奏していくというのは、何とすばらしいことでしょうか。このすばらしさを味わってしまうとオーケストラの虜になってしまいます。が、ちょっと待った!現実そんなに甘くはない!厚みのある演奏になるはずだったのが、「うなり」だらけの旋律になってしまったり、快いハーモニーができるはずだったのが、身の毛もよだつ不協和音になってしまったり、なかなか他人と合わせるといのは大変なものです。しかもその人数が多ければ多いほど大変になっていきます。技術面以外でも性格も考え方もいろいろな人の集まりです。見解の違いから大喧嘩なんてこともあるかも知れません。考えてみれば、生まれも育ちも、まして音楽環境も全然違う人達の集まりなので最初からうまく行くはずはありません。でも心配無用。パート練習、分奏、合奏、合宿、コンパ……と皆で同じ時を過ごしてゆくうちにピタッとあうはずです。そして皆の気持ちが一つになった「仲間」になる頃には、耳も良くなり、技術も向上し、更に深い音楽表現ができるようになっていくでしょう。

東大オーケストラはとてもいい雰囲気だと思います。先輩や指導者に恵まれ、だれでもオーケストラが好きになるでしょう。一緒にオーケストラを楽しみ、良い音楽を創ってゆきましょう。

---

## 先生方のご紹介

東大オケでは、多くの一流の先生方に練習にお越しいただき、ご指導いただいています。音楽経験の長さを問わず、日々の練習で先生方にすばらしいご指導をいただき、音楽に対する思いを感じることができるとは、東大オケの特権でもあります。4人の指揮者の先生方の他に、各セクションの分奏などでご指導いただいている先生方を以下にご紹介します。

### ○名誉トレーナー

井上 将興 元東京音楽大学教授

堀 伝 洗足学園大学講師/元 NHK 交響楽団ヴァイオリン奏者/水戸室内管弦楽団/元東京交響楽団コンサートマスター/サイトウ・キネン・オーケストラ

井料 和彦 元東京フィルハーモニー交響楽団首席ファゴット奏者

津堅 直弘 元 NHK 交響楽団首席トランペット奏者/国立音楽大学客員教授/洗足学園音楽大学客員教授/東京音楽大学准教授/尚美学園ディプロマコース講師/沖縄県立芸術大学講師

### ○弦楽器トレーナー

青木 高志 元東京フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター/モルゴア・クアルテット(1992～2001)/ストリング・アンサンブル・ヴェガ

堀江 和生 東京都交響楽団ヴィオラ奏者

桑田 歩 元 NHK 交響楽団首席代行チェロ奏者/ストリング・アンサンブル・ヴェガ/元群馬交響楽団首席チェロ奏者/元新星日本交響楽団首席チェロ奏者

堀 了介 元 NHK 交響楽団首席チェロ奏者/水戸室内管弦楽団/東京音楽大学教授/サイトウ・キネン・オーケストラ

吉田 秀 NHK 交響楽団首席コントラバス奏者/東京音楽大学客員教授

### ○木管楽器トレーナー

大森 悠 大阪フィルハーモニー交響楽団首席オーボエ奏者/当団 OB

中川 鉄也 ドイツ国立フライブルグ音楽大学卒/フリー演奏家

菅原 眸 デトモルト音楽大学留学/元 NHK 交響楽団ファゴット奏者/  
元愛知県立芸術大学教授/元東京音楽大学講師/日本ファゴット（バスーン）協会名誉会長/  
International Double Reed Society 終身会員

山本 忠 元東京都交響楽団ファゴット奏者/東京都交響楽団団友

### ○金管楽器トレーナー

須山 芳博 元シティ・フィルハーモニック管弦楽団首席ホルン奏者/元東京金管五重奏団団員/  
武蔵野音楽大学専任講師/洗足学園音楽大学講師

在原 豊 東京金管五重奏団トランペット奏者/昭和音楽大学講師

北村 源三 元 NHK 交響楽団首席トランペット奏者/東京トランペット四重奏団員/国立音楽大学音楽招

---

聘教授

○打楽器トレーナー

- 大塚 敬子 元東京交響楽団打楽器奏者/元オーストリア放送交響楽団打楽器奏者/元宮内庁式部職楽部教授/ロイヤルメトロポリタン管弦楽団打楽器奏者
- 堀尾 尚男 東京音楽大学非常勤講師/神奈川フィルハーモニー管弦楽団ティンパニ、打楽器奏者

○その他にお世話になっている先生方

〈弦楽器〉

- 大宮臨太郎 NHK 交響楽団第2 ヴァイオリン首席奏者
- 松田 拓之 NHK 交響楽団第1 ヴァイオリン次席奏者/室内オーケストラ「ARCUS」
- 正田 響子 読売日本交響楽団ヴィオラ奏者
- 中村翔太郎 NHK 交響楽団次席ヴィオラ奏者
- 市 寛也 NHK 交響楽団チェロ奏者/Quartet Exploce
- 谷口 拓史 岡山フィルハーモニック管弦楽団首席コントラバス奏者/元兵庫芸術文化センター管弦楽団首席コントラバス奏者
- 米長 幸一 神奈川フィルハーモニー管弦楽団首席コントラバス奏者

〈木管楽器〉

- 浦 丈彦 読売日本交響楽団オーボエ奏者/桐朋学園大学非常勤講師/愛知県立芸術大学非常勤講師/昭和音楽大学非常勤講師
- 和久井 仁 NHK 交響楽団オーボエ奏者/東京芸術大学非常勤講師/愛知県立芸術大学非常勤講師
- 鈴木 一志 日本フィルハーモニー交響楽団首席ファゴット奏者/東邦音楽大学講師/洗足学園音楽大学講師
- 森田 格 NHK 交響楽団ファゴット奏者/上野学園大学非常勤講師
- 中村 淳二 NHK 交響楽団フルート奏者

〈金管楽器〉

- 曾我部清典 洗足学園音楽大学トランペット講師
- 井上 順平 元東京都交響楽団トロンボーン奏者
- 岸良 開城 日本フィルハーモニー交響楽団副首席トロンボーン奏者/東京音楽大学非常勤講師/トロンボーン・カルテット・ジバング
- 堀 風翔 東京佼成ウインドオーケストラホルン奏者/洗足学園/ニューフィルハーモニック管弦楽団団員
- 渡辺 功 日本ユーフォニアム・チューバ協会理事/東京交響楽団首席チューバ奏者

○常任運転手

- 日本通運（羽石様・山下様）

（敬称略）

---

## 総務挨拶

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。

東京大学音楽部管弦楽団、通称「東大オケ」は、昨年 2020 年に創立 100 周年を迎えた、東大の中でも由緒あるオーケストラです。

当団では、楽器の経験年数を問わず、総勢 140 名を超える現役東大生が活動しております。文理や学年の垣根を超えて、たくさんの友人を作ることができます。

毎回の練習では、日本音楽界を代表する指揮者・演奏家の先生方をお招きし、トップレベルの音楽に直接触れ、学ぶことができます。本紙記載のトレーナーの先生方の一覧も是非ご覧ください。入団してから、一人一人が成長できる環境が用意されています。

当団の特徴としては、何よりも活動の多彩さが挙げられます。東大の式典演奏を始めとして、五月祭、日本国内を回るコンサートツアー、小中学校へ訪問する音楽教室、駒場祭、都内一流ホールでの定期演奏会など様々です。例えばコンサートツアー。団員の出身地を中心に、日本全国のホールで演奏を行い、毎年たくさんのお客様にご来場いただいています。ホール一杯のお客様に当団の演奏をお届けし、割れんばかりの拍手を頂戴することは、何事にも代え難い経験です。

これらの多彩な活動は、全て団員が企画し運営を行います。演奏会を企画しプレゼンをしたり、戦略をたてて広報活動を行ったりと、音楽以外にもやりがいのある経験をすることができます。

感染症によって、大学生の生活は大きく変わってしまいました。あらゆることがオンラインで代替、少人数化されていく中、オーケストラは今もなお同じ空間で、同じ出来事を共有することにその意義を見出しています。今となってはなかなか無い機会ですが、その中で得られる感動や達成感を、東大オケでは味わっていただけると確信しています。

入学した今、これまで思い描いていた大学生活との違いに不安を覚える方もいらっしゃると思います。東大オケは、これまでの形を可能な限り保持しながら、変化にも柔軟に対応し、有意義な活動のあり方を日々模索し続けています。

新歓期を通して、当団について知っていただける機会を様々な形でご用意しております。当団に少しでも興味を持ってくださったなら、ぜひ団員の話聞き、何より当団の公開練習を聴きにいらしてください。

東大オケは今年度 101 年目、次の百年に向けて踏み出す挑戦の年です。新たなスタートを切る東大オケで、私たちと音楽を共にし、充実した学生生活を送りませんか。

令和 3 年度本郷総務 01Vn. 宮野 純

---

---

## 駒場総務挨拶

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます！！

この度は東京大学音楽部管弦楽団（東大オケ）の新歓パンフレットを手にとりいただき、本当にありがとうございます。このページをご覧になっているということは、少なからずオーケストラや音楽に興味をお持ちなのではないかと思えます。このパンフレットを通して、少しでも東大オケのことを知っていただければ幸いです。

東大オケの魅力は、なんといっても音楽に全力で打ち込める環境が整っていることです。まず、当団は東大唯一の公認オーケストラですから、よい練習会場を優先して得ることができます。特に大学の音楽系サークルにおいては、音出し可能な部屋の不足から、練習のたびに外部施設を借りるなど何かと苦勞がつきまとうものです。しかし、東大オケの場合は学内の施設を定期的にご利用することができ、これは大きな強みと言えます。また、東大オケでは一流の先生方から指導を受けることができ、技術的にも音楽的にも成長できること間違いなしです！そして、これが一番重要なのですが、東大オケの団員は誰もが音楽への情熱を持っていて音楽に真摯に向き合っています。オーケストラというのは一人では出来ませんから、このように素晴らしい仲間恵まれることは本当に幸せなことではないでしょうか。

新型コロナウイルス感染症の流行している昨今、新入生の皆様も生活が一変し、さまざまな不安を抱えていらっしゃると思います。東大オケも昨年度は、練習や本番が何度も中止・延期となってしまう苦しい一年となりました。そんな中で、少しでも音楽が出来るように様々な可能性を模索しつつ活動を続け、11月の駒場祭での演奏会開催まで漕ぎ着けることが出来ました。

この新歓パンフレットには東大オケに対する団員のありのままの声が載っていますので、ぜひ部活動・サークル活動選びの際の材料にしてください。団員一同、新入生の皆様と共に音楽ができるのを心待ちにしております。

令和3年度駒場総務 02Hr. 松井 幹